

朝日・大学パートナーズシンポジウム
「なぜ日本の若者はひきこもるのか？」開催のご挨拶

主催者として一言ご挨拶を申し上げます。一段と厳しい寒さのなか、遠方の方々を含め大勢の方々にご参加いただき、主催者として大変嬉しく思いますと同時に大きな責任を感じております。朝日新聞でこのシンポジウムが告知されて数日後、定員 300 人の 2 倍を超える参加希望をいただきました。ご家族での申し込みも数多くございました。抽選により決定いたしました方に入場券を送付しましたのちにも、お申し込みがあったようであります。この課題が、きわめて切実であることを改めて痛感し、大きな責任を感じている次第です。

本シンポジウムは、和歌山大学における大学生活につまずいた学生へのケア、支援の実践—のちに報告いたします宮西教授を中心としたスタッフ・自助グループ・当事者の実践—を土台として構想されたものでございますが、本日このように切実な関心をお持ちの方々に参加していただけるシンポジウムとして組み立てることを可能にいただきました朝日新聞社、斉藤先生ほかゲストのみなさんに感謝する次第でございます。

さて私は昨年 8 月より学長をつとめておりますが、もともと教育学、社会教育という分野の研究者であります。この 20 年はとくに子育て支援・子育て家庭支援をテーマとして取り組んでまいりました。従いまして 0 歳からの子ども、その子どもさんをお育てになるお母さん、お父さん、あるときには祖父母の方々の苦悩に同伴してまいりました。また子どもや親世代を支援する専門職の方々の格闘にも同伴してまいりました。それだけに、本日のシンポジウムが、ご参加のみなさんの切実な関心に応えるとともに、皆様方の明日への励ましとなることを願っております。

私自身学長に就任しまして心が痛みますことは、大学に希望をもって入学しながら退学、休学の手続きをせざるをえない学生・ご家族があることでございます。大学生生活を持続する精神的エネルギーを失ったという理由、自分はいまうまくコミュニケーションができない、講義で理解できないことがあっても質問できない、したがって学習についていけないなどの理由で休退学する事例もあるわけでございます。

そうした実情をふまえて 和歌山大学におきましては、大学の基本的責務は、「学生の人生の支援」であると考えております。そのために「学生の、子ども期から青年期に至る学習体験、生活体験等人間形成上の諸課題」、すなわち 18 歳までの育ちの到達をふまえた教育をしよう、学生支援をしようと考えております。同時に現在の学生たちのつまずき、苦悩を未来に生かすために、18 歳までの人間としての成長にとって何が必要で、何がストレスであるのかを社会に明らかにすること、人間を育てる学校教育システムのあり方、教育にコミットする専門職のあり方、親の子育て観や親の役割のあり方への新しい提起も責務だと考えております。

幸い今日、日本におきましても、新しい政権は、ようやく社会で子どもを育てるという方向（個別的な施策の評価は別にして）に大きく舵を切ろうとしております。

従いまして、本日のシンポジウムおよび私たち、みなさま方の経験は、当面の切実な問題への希望を与えるものとなるとともに、未来の子ども、未来の親、そして日本社会のあり方を探る上で大きな意味のあるものであることを確信し、ご挨拶に代えさせていただきます。

平成 22 年 2 月 6 日

国立大学法人和歌山大学

学長 山本 健 慈